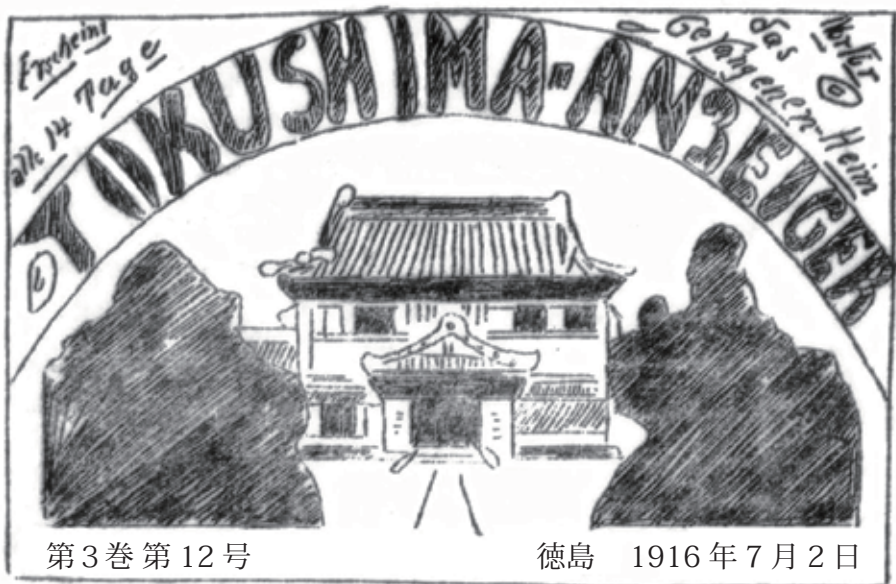




現状について

6月16日、フォン・ベートマン・ホルヴェーク首相は再び帝国議会で演説した。その演説はすでに一部が発言どおりこちらに届いている。その中でわれわれにとって何よりも関心があるのは、首相が和平への展望と軍事的情勢について述べたことである。

首相は、ドイツがかなり前に現下の状況を基盤として和平交渉に入る用意があったことを強調した。しかし敵国は自分たちの状況を改善できることを期待していたらしく、拒絶されてしまった。この件に関する現在の状況を、首相は次のように述べて解説している。

しかし敵はこの事実から自分の目を閉ざそうとしている。それ故に、われわれはこの戦いを最終的な勝利まで続けなければならない。われわれは敵に道を開けるという義務を果たした。敵は嘲り、傲慢にも拒絶した。だからわれわれが始めたような和平の議論は余計なものであり、悪なのだ。

6月12日、つまり最新の大ロシア攻勢がすでに大きく進展している最中に、首相は「今わが軍は全前線においてかつてないほど強力である」と述べた。

現在の軍事状況は次のとおり。

ヴェルダンの敵軍要塞から、陣地が次々と落とされている。この強力な陣地が完全にわが手に落ちるまでには、まだ少し時間がかかるであろうが、わが軍の指揮官の有能さとわが軍の比類なく勇敢な部隊の辛抱強さをもってすれば、この地でのフランス軍の抵抗を打ち破ることは確かである。ヴェルダンの陥落によってフランスが軍事的に壊滅するわけでは決してないが、この難攻不落とされている要塞がわが手に落ちるならば、フランスのうぬぼれに強烈な打撃を与えるだけでない。われわれも軍事的観点からこの成功を過小評価するには及ばないのである。わが軍の参謀本部側からこの地がどう評価されているのかは、ここで進められている倦むことのない戦闘から一番良く分かることである。

ロシア軍の3月攻勢がヒンデنبルク元帥とその部隊によって退けられ、攻撃をしてきた全ての場所でロシア軍に多大の損害をもたらししたが、その後今月に新たなロシア軍の攻勢が始まった。それにより確かに一部でロシア側は少なからぬ地歩を占めることとなった。ヴォリニエン（露：ヴォリンスク）では特にベーム・エルモリ大将の部隊が排除され、プランツァー・バルティン大将はロシア側にほとんどブコヴィナ全土を譲らねばならなくなった。ブコヴィナの首都チェルノヴィッツは再度敵の手に落ちたことになる。しかしわが方の効果的な反攻がすでに開始されている。フォン・リンジンゲン大将は、友軍の退却の動きに同調せず、そのために現在進出してきたロシア軍の側面に位置することになる彼の軍の右翼で、ロシア軍の新たな陣地の一部を奪い返して6月16日から25日までに41,000人の捕虜を捕らえた。6月30日には当地にヒンデنبルクの部隊がスモルゴフから進出してペテルスブルク・モロデツノ鉄道ぞいのヴィレイカを占領したとのニュースが入ってきた。この勝利の詳細はまだ不明であり、あまり

に大胆な希望をいだく前に、詳細が分かるまで待つことにしよう。

オーストリア・ハンガリー軍はトレンティーノで進攻し、イタリア軍をかなり押し返して 40,000 人の捕虜と多くの砲と多量の軍需資材を奪った。一方、イタリア軍はロシア軍の攻撃の機会を捉えてオーストリア軍の新しい陣地へ反攻をかけてきたが、それは鉄道終点のアルジエロとアジアーゴでは成功を収めたらしい。この点についてドイツとオーストリアからの報道はまだない。

クト・エル・アマラの陥落直後、ロシア軍部隊がバグダッド東部のペルシア国境に現れたが、トルコ軍を前に敗退したり、押し戻されたりした。アルメニア前線でも戦勝の幸運はわが同盟国軍にあり、ロシア軍に幾多の敗北を味わわせたのであった。

海上の情勢は、わが軍のユトランド沖での大勝利によりドイツ軍に有利となってきた。イギリス艦隊の損失は—ドイツ側では「リュッツオー」と「ロストック」も計算に入れ、イギリス側ではイギリス海軍本部公式発表による損害だけを数えるとして—ドイツ側と 2 対 1 となる。これによりイギリス艦隊は無敵艦隊の名声を永久に失った。さらに重要なことは、物資と人員にかなりの損害をこうむったことである。

すべての戦場でこれほど活動が盛んであったことはめったにない。さらに活動が盛んになることが考えられるし、とりわけ北フランスのイギリス軍と対峙している前線で新たな軍事行動が予測される。

ヴェルダン（2）

ヴェルダンの戦いは、昔の戦争における集落での戦い（例えば 1815 年のリニー）と同じ効果がある。ただ全てが今日の戦争の巨大なものへと変貌しているのである。つねに新しい部隊が呼び寄せられ、狭い村の小路へ放り込まれる。そうしてこの釜の中で全てがひとつの粥へと溶けてゆく。

その粥は絶えず新しい部隊を吸い上げ、不気味な誘因力と溶解力を発揮する軍事的に疾患地点と呼ばれるものが生まれる（たとえば 1870 年 8 月 18 日のマンス峡谷のあるサン・ユベール）。ヴェルダンは今フランス戦線での疾患地点なのである。敵は 30 個をはるかに越える師団をここに投入したが、疾患地点は治癒するどころかさらに蝕まれ続けている。かつての戦場の村のように、ヴェルダンはおそらく新たな兵団を受け入れ続けるだろう。しかしあまりに要塞が密集していて、いくつかの個所では狭められすぎてこれらの兵団に自由な展開の余地を与えることができなくなっている。それゆえ攻撃する方は、兵力が劣っていてもここで成果を上げることができる。どうやらフランス軍はこの疾患地点で出血を始めているようである。わが軍のヴェルダンへの攻撃で戦術上の結果がすでに 2 点明らかとなっている。フランス軍は春の大攻勢には取りかからない。わが軍が先手を打ったのだ。そしてロシア軍は、その同盟国の負担を軽減するために軽率にも突破作戦をやってしまった。それも不利な季節に。ドイツ軍がまさにフランス軍前線で最強・最重要な個所を攻撃したので、つまり火中の栗を拾おうとしたので、フランス軍はドイツ軍の攻撃を最初はどうやら真剣には受け取らなかったようだ。この攻撃でフランス軍は一種の板挟みの状態におちいった。ヴェルダンを守ろうとするならば、前線の別の個所をある程度まで手薄にする、少なくとも予備軍を大勢動員して来るか、あるいは他の場所で牽制攻撃を試みるためにヴェルダンをその守備隊だけに任せるかをせねばならない。しかしヴェルダンはフランス軍前線の肩関節にあたって、非常に重要な個所であり、その重大な脅威は座視できるものではない。敵がヴェルダンを何が何でも全力で保持しようとするならば、前線全体でそれ以外の個所を突破される危険にさらすことになる。何ともすばらしい板挟みである。フランス軍前線でまさに最強、最重要な個所を攻撃するという考えは、天才的アイデアである。それに加えドイツに近くて鉄道の連絡が良いので、迅速な弾薬補給が可能となる。このことは現代戦争において特に重要なことである。最後にヴェルダンはフランス軍陣地の突出

部として、西部では側面砲撃可能な数少ない場所の一つである。このことは砲撃の効果の上で際だって重要なことであり、まもなくここで三方からの挟撃が可能となるだろう。また戦闘が長引いていることもわれわれにとって基本的に有利なことである。なぜなら、それだけ結果的に敵軍の出血が多くなり、ひいては政治的にそれだけ戦後のフランスは弱体化するからである。天才的発想が本質的なものとそうでないものを区別する能力であるとするならば、これはドイツ軍参謀本部の天才的発想のなせる業である。なぜなら敵をぐらぐらにしていまえるような敵陣地の要の場所を見つけたからである。

0.

完

収容所展望

最近の鳥類数調査によれば、収容所には鳥小屋が 110 カ所あり、ニワトリ 109 羽、アヒル 28 羽、ハト 6 羽の合計 143 羽がいる。鳥の飼育の成功で、新しく飼育する人がますます増えている。ただし残念なことに、鳥たちは狭い柵の中で歩き回らねばならないので、空間不足から道路にまで出て行くものがある。かわいそうな鳥がもう少し自由が得られるように、中庭の一部を区切って鳥用の垣とした方がいいのではないか。すばらしき雨の天候がこの調子で続くなら、中庭はそれほど利用できるものではないし。若いアヒルにとってはこの天気はうってつけのようで、無数の水たまりが恰好の遊び場になっている。生き生きと動き回る様子に、数多くの人が引きつけられて眺めている。

庭の植物にも、この天候は好結果をもたらしている。カボチャの蔓はすあずまやでに四阿の屋根にまきつき、キュウリはふくらんできて、背の高いヒマワリは本当に森のようにになっている。建築作業が進み、収容所の様子が大き

く変わった。衛兵所が増築になって、そこで誰もがすきのようにシャワーを浴びたり、身体を洗えるようになった。面倒な水運びがなくなった。この改築は、ちょうど風呂のボイラーがまた修理に入っているだけに、まさしく時宜を得たものであった。

安全性確保のために、垣根に新しく電灯が2つ付けられ、新しい歩哨も置かれた。先週、小松島に日本の戦艦石見（旧露ポベ^{いわみ}ーダ号¹）が停泊し、一般に公開された。収容所の向かい側にある、富田川の船着場には艦に乗りたい人々が押しあいへしあいしていた。巡査たちは、帆船や動力付きのボートへの乗り込みの整理と、乗りすぎを防ぐことに大忙しであった。ここでもまた、アジア人の控えめなところに感心するのであるが、暑い中何時間も船に乗れるのを待ち、船に乗ったら乗ったで、ぎゅうぎゅう詰めになって運ばれて行くのである。もちろん、みんな扇子を持っていて、手を休めることなく扇いではいるが。

スポーツ競技会は最後まで実施できた。月ごとのミサは、カトリックについては金沢のフランツ・フィンガー司祭によって、プロテスタントについては6月22日に宣教師のシラー博士によって執り行われた。--- 夏になって、収容所でふつうの服装というのが、ズボンとシャツだけという恰好（これはこの国ではありふれたことだ）なので、服を消費するということが少ない。ところが、服が足りないという者がちょくちょく出てくる。なぜなら、先ほどの服装は外出にはやはり不向きだからである。義援物資については、靴と下着の配布があった。

スポーツ週間

今回のスポーツ週間も、だいたい天気が悪かったせいなのだが、のびのびになり、またしても「スポーツ月間」となった。

1 正しくはアリオール号、ポベーダ号は「周防」となった。

個々の競技の結果は以下のとおり。

ファウストバル：一番面白くて激しい試合になったのは、もちろんレベル 1 の試合で、収容所内のベストチーム 2 つが対戦した。第 3 チーム（カウマンス）はゲームを中断したが、レベル 2 でもエキサイティングな試合があり、特にウンガー、レーヴェンの 2 チームの決勝戦は前回のスポーツ週間からどれほどの進歩があったかを示すものであった。

結果：レベル 1 第 1 チーム（ハイアー二等兵曹）4 点、第 2 チーム（レンケル一等兵曹）2 点。

レベル 2 1 等ウンガーチーム 6 点、2 等レーヴェンチーム 4 点、
バルチーム 2 点、ライポルトチーム 0 点。

シュラクバル：今回初めてシュラクバルがスポーツ週間のプログラムに入った。それに応えての参加チームは、4 チームを下回らなかった。このすてきで健康的なドイツのゲームがこれからも同じ程度に行われていて欲しいものだ。

結果：

1 等 チーム・モンゼース	4 点	161 ボール
2 等 チーム・キステンブリュッガー	4 点	156 ボール
チーム・ラングハイン	2 点	172 ボール
チーム・シュマーレンバッハ	2 点	140 ボール

八種競技：八種競技は非常に喜ばしい成果をもたらした。個々のほぼ全ての競技で前回の成績を大きく上回った。優勝者（プリンツ一等兵曹）は総得点で 146 点を上げたが、これは本土での大競技会でも 1 等を獲得できるような成績である。

結果：

1 等 プリンツ一等兵曹	146 点
2 等 バウアーファイント	140

3等	モンゼース	132
4等 a	レンケルー等兵曹	128
4等 b	パウアー	128
5等	ヒュブナー	108
6等	アウアー	107
	Henr. ローデ	102
	グレーベ	82
	(自由参加) クノープ	109

次の4つの競技については、それぞれ申し込みが1名であった。しかし重量挙げの1例を除き（点数が高かった（キーアドルフ 43点）、八種競技参加者と賞を争うまでにはいたらなかった。

結果：

棒高跳び	アウアー	2.95m
砲丸投げ	レンケルー等兵曹	7.20m
重量挙げ	キーアドルフ	43
幅高跳び	バウアーファイント	1.50m

表彰式は7月9日（日曜日）に行われる。

第43回演奏会（1916年7月2日（日））

1. 行進曲「ヒンデنبルク万歳」 ミヒャエル
2. 歌劇『ドン・ジョヴァンニ』序曲 モーツァルト
3. 間奏曲、バレエ曲『コッペリア』より ドリーブ
4. 「ベルリンは揺れる」
人気のオペレッタ曲を集めたメドレー モレーナ
5. ヨルク行進曲

第 44 回演奏会（1916 年 7 月 9 日（日））

- | | |
|-------------------|----------|
| 1. 行進曲「志操堅固」 | ブロン |
| 2. 歌劇『トロバトーレ』メドレー | ヴェルディ |
| 3. 歌曲「心と花」 | トバーニ |
| 4. ワルツ「星の彼方に」 | フォルシュテット |
| 5. 間奏曲「マンシ」 | ジーデ |

息子へ

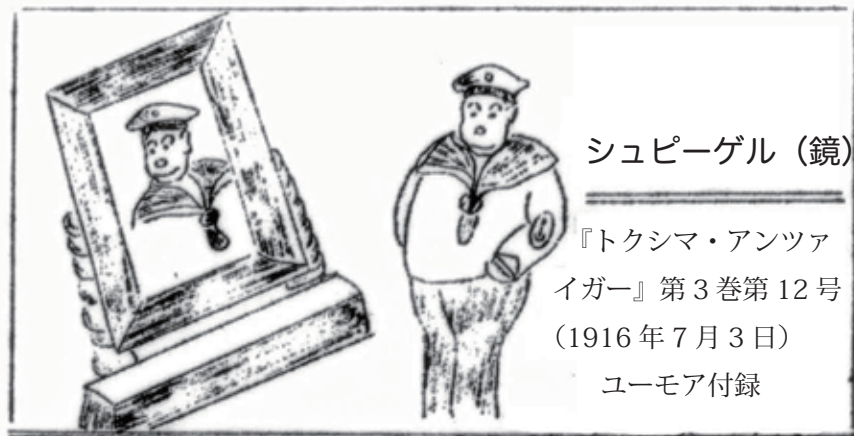
ヴァルター・ブレーム

息子よ、お前は 16 歳になって
甘えん坊の母さん子だったのに
子供部屋から手を振り切って
笑いながら火の世界へ飛び込んだ
希望に満ちた明るい人生を
炎で真っ赤な犠牲の穴に投げ入れ
激しい戦いで震えることなく
雨の中一人で夜の見張りに立っていた
男達がおそれるあらゆる恐怖、
飢えと渇き、怪我、死の苦しみ
それらをお前の自由な心の命ずるままに
泣き言も言わず、雄々しく耐えた
お前のいる軍勢の前に
ロシア軍の砦が立ちはだかったとき
兄弟とともに駆けて行き
こうしてグロドノへの突撃に加わった

しかし勝利に沸き返っている中に
ロシア軍の榴弾が炸裂し
焼けるような痛みが
お前の若い身体を苛^{さいな}み、麻痺させた

その時、お前から遠くにいるこの私も
ロシア軍の弾丸に狙われ、傷を負った
血を流して、われら二人は表明したのだ
ドイツを攻撃しようという奴は先ず我らに当たってこい
これまで、我らは父と息子であった
しかし聖なる血という聖なる液体によって我らは新たに
ひとつとなる

なぜなら戦いに傷ついた戦士として
お前と私は兄弟としての血の契りを結んだのだから
男の崇高な努力の輝かしい目標なのだ
私は自らの種が熟したのを見た
さあ、わが胸に来たれ、わが人生の誇りよ。



新しい靴



アウグスト：何でもまたそ
んな大きな靴にしただ？

マクセ：もともとはロ
シア人用なんだ。

ア：どうして？や
つらそんな大き
な足をしている
のか？

マ：いや。これ
を使ってポーランド
をドイツに蹴りつけ
るつもりだったのさ。



「ふうーっ。暑いぜ。陰で 32 度だよ。」

「うん。じゃ何でずうっと陰の中にいるんだ。」



カフェ「衛兵詰所」

演劇がすんだら、あるいは誕生日や
その他の祝い事の後、
小一時間ほどこへ行くといいでしょう。
— カフェ「衛兵詰所」²へどうぞ —
極めて安価。丁寧なサービスで
朝昼晩と吹奏楽つきです。
改築してとても大きくなりました。

カシさん（店子）

2 衛兵詰所には営倉（懲戒用の簡易牢）が附属していた。

新聞報道によれば、ポルトガルの大
使館付き武官がベルリンを出る前に
「サルバルサン」のチューブを 500 本
も買おうとしたそうだ。

この哀れな男はかわいそうだ。おそ
らく戦争で必要な治療を中断されたの
だろう。それともシラーの言うような
「賢い男は備えをする」という類の人
間なのか。それにしても 500 本とは。

